

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「チュルク諸語における情報構造と知識管理—音韻・形態統語・意味のインターフェイサー」（2020年度第1回・通算第1回研究会）

2020年度第1回研究会（通算第1回目）

日時：2020年6月7日（日）14:00-17:00

場所：Zoomによるオンライン開催

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」

報告者：児倉徳和（AA研）・佐藤久美子（国立国語研究所・AA研共同研究員）

今回の研究会は昨年度（2019年度）まで遂行された共同研究課題「チュルク諸語における膠着性の諸相—音韻・形態統語・意味の統合的研究—」（研究代表者 佐藤久美子）の2019年度第2回研究会が新型コロナウイルス感染拡大により中止となったことを受け、本課題の第1回研究会として開催された。研究会では下記2件の研究報告と討論が行われた。

1. 吉村大樹（AA研フェロー）

「トルコ語の接語 mI は疑問のマーカークなのか？」

2. 奥真裕（AA研共同研究員，東京外国語大学大学院）

「トルクメン語の再帰形に関する予備的考察」

以下に各報告の要旨と、討論の内容をまとめる。

1. 吉村大樹（AA研フェロー）

「トルコ語の接語 mI は疑問のマーカークなのか？」

本発表では、トルコ語で従来「疑問のマーカーク」と言われてきた接語 mI について、文中に生起しているが疑問文とは言えないような文があること、また疑問文の成立にこの接語が必ずしも生起しないような現象があることを指摘した。mI の生起は諸否疑問文、選択疑問文（ただし、疑問詞疑問文以外の諸否疑問文、選択疑問文）の成立の一要素ではあるが、疑問文成立に必ずしも必須の要素ではない場合がある。これを踏まえ、本発表では mI を疑問のマーカークとするのではなく、話し手が命題（の全体または一部）に対する仮説を提示するという機能を担っていることを主張した。これにより、なぜトルコ語では多くの疑問詞疑問文で mI と疑問詞が共起しないのかが説明できる。すなわち mI の機能と、解答となる可能性のある選択肢のうちのどれかを尋ねる疑問詞の機能は互いに意味的に排他的だからであると説明できる。またこれにより、排他的でない関係が保証された場合は、一文内に共起可能であることも説明できる。

主な質疑およびコメントの内容は、以下の通りである。まず、エコー疑問文について本発表で言及した

が、諾否のエコー疑問文と疑問詞的エコー疑問文があり、これらの区別を明確に行うべきであるという指摘があった。また、mI 接語の疑問文でない用法（仮定節の導入、重複形式の導入）は通時的な観点で見れば、まず疑問の用法があつて、仮定節・重複形式等の用法は後から派生したと考えるのが自然ではないかという指摘もあった。このほか、他のチュルク諸語における「疑問のマーカ―」との振る舞いの類似点・相違点について言及することや、モダリティという観点からの mI の振る舞いの記述・説明の必要性など、多くの有益なコメントがあつた。

2. 奥真裕（AA 研共同研究員，東京外国語大学大学院）

「トルクメン語の再帰形に関する予備的考察」

トルクメン語の再帰形に関して、先行研究では周辺的な用法を取り扱っていない、または元の動詞の文との関係において検討が行われてこなかったという問題点があつた。そのため、本発表では再帰接尾辞-(I)n 及び-(D)l により作られる再帰動詞全体を対象に、再帰動詞の元の文との統語的対照を中心としつつ、それらの分布を明らかにしようとした。結果として、再帰接尾辞の形態の分布を調べたところ、「元の文の他動詞主語が再帰文では自動詞主語として現れるもの」と「元の文の他動詞主語が再帰文でも他動詞主語として現れるもの」の場合には接尾辞は-(I)n しか現れず、「元の文の目的語が再帰文では自動詞主語として現れるもの」と「元の文の自動詞主語が再帰文でも自動詞主語として現れるもの」の場合には-(I)n 及び-(D)l が現れることがわかつた。また「元の文の自動詞主語が再帰文でも自動詞主語として現れるもの」の意味的特徴として予測可能性が低い傾向にあることがわかつた。

主な質疑およびコメントの内容は、以下の通りである。まず、本発表で「元の文の他動詞主語が再帰文でも他動詞主語として現れるもの」としたのものの中には「着点」と「利益」の機能を持つものがあるが、本研究では機能面を検討しないのかとの意見があつた。また、キルギス語では受動が再帰を意味することがあるように、受動と再帰の関係も重視すべきとのコメントが複数の参加者からあつた。最後に、発表者は、受動動詞も再帰接尾辞と同じ形態素から作られるため、自動詞から作られる受動動詞との区別が困難であると発言したが、自動詞から作られる受動動詞の文は非人称受身になるため、再帰の場合とは異なり、主語が現れないのではないかという指摘があつた。

研究会には 23 名（うち代表者・所員・共同研究員 18 名）の参加があり、盛況のうちに行われた。

以 上

（文責・児倉徳和）